

---

# 早期体験実習を終えて

---

## 早期体験実習を終えて

歯学科2年 内田 祥

今回、私たちは早期体験実習で知的障害者総合支援施設「ココニーにいがた 白岩の里」と、知的障害者更生施設「太陽の村」へ体験実習に行ってきました。ココニーは主に言葉によるコミュニケーションが難しい方やそのほか行動上での障害をもった方が児童部、成人部、高齢期更生部、重複更生部、社会復帰部にわかれて入居しています。散歩や障害の軽減を目指した訓練、社会復帰のための訓練、受注作業などを行っているそうです。太陽の村は主に自閉症の方がA～E棟にわかれて入居しています。園芸や創作、軽作業、そのほか受注作業を行っているそうです。

私たちはまず、ココニーで体験実習をしました。私たちの班はココニーについてから説明をうけ、児童部の見学にいきました。説明のときに知的障害によって言葉によるコミュニケーションは困難だ、と聞いていたのでこういった対応をすれば良いのか不安を感じていました。ところが、児童部には小学生くらいの子から同年代の方までいて思っていたより明るく、職員の方も母親や父親のように接していて楽しそうな雰囲気でした。なかには積極的に私たちにスキンシップをはかってくる方もいました。こうした明るい雰囲気の中、私たちの不安は一気になくなりました。私たち学生のなかには、児童部の中学生くらいの子がすっかり懐いてしまい、次の見学場所に行くに行けないという状況になるほど仲良くなった学生もいました。その後、私たちは社会復帰部の見学へ向かいました。ここでは障害がある程度軽い方や、社会復帰へ向けての訓練をしている方が受注作業を行っていました。なかには職員寮の一世帯分を借りて職員の方の手助けの下でアパート暮らしのような生活をしている方もいるそうです。ここでの

作業はボルトの取り付けや、菓子箱の箱折などを行っていました。作業をしている方はみな真剣な表情で作業をこなし、その手際の良さには目を見張るものがありました。社会復帰部の方はここで継続して働くことや職場の同僚と協調して働くことの大切さを学ぶそうです。また、箱折の作業場に入ると作業中にもかかわらず社会復帰部の方のほうから挨拶をしてくれました。言葉でのコミュニケーションが困難と聞いていたので驚きとともに、こちら側から先に挨拶をできなかったことに後悔しました。

ココニーでの体験実習の2週間後、今度は太陽の村へ実習に向かいました。「自閉症」という病気は特別なものではなく、たとえば健常者のなかに「走るのが苦手」な人がいるのと同じように彼らは「コミュニケーションが苦手」なのです。ただ、現代においては他人とのコミュニケーションや情報のやりとりが必要不可欠なため、コミュニケーション能力の低い自閉症の方が障害者としてみなされてしまいます。かつて狩猟時代には自閉症の方は狩猟において活躍し、その社会的立場は上位にあったといいます。「障害者」という定義は時の流れとともに変化していくものだ実感しました。太陽の村ではA棟からE棟まで職員の方に紹介してもらいながら見学しました。はじめはコミュニケーションをとれるのか心配でしたが、ここでもその心配はすぐに払拭されました。A棟に入るとすぐ、自閉症の方のひとりテーブルへわたしたちを招いてくれました。班によってはトランプをした班もあるようです。また、他の棟にはサヴァン症候群の方がいて、でたらめに言った数年後の日付の曜日をぴつたりと言い当てるところを見せてもらえました。ここで自閉症の方は決して能力が低いわけではないということを再認識させられました。また、太陽の村から新潟駅までのバス停とアナウンスのすべてを記憶するなど、記憶に関する特技を持っている方もいました。こ

の方はとても明るく、言わばお調子者といった感じの方で、施設内をずっと案内してくれました。また作業場の見学では、作業台の手作りのついたてなど、至るところに職員の方の気配りや努力、ぬくもりが感じられました。最後に引率の大島先生の自閉症の方への歯磨き指導の様子を見学しました。健常者に対する指導と特別違うことをするわけではないのですが、意思疎通をはかるのがやはり困難なようでした。これまでは自閉症の方や障害者の方への歯磨き指導など思いもよりませんでした。実際にその場にいるだけで将来への自覚を深めることができました。

最後に、この実習で初めて障害者の方とふれあい、多くのことを学び、多くのことを考えさせられ、一歩成長することができました。「同じ地球に生きる同じ人間。たとえ言葉は通じなくてもコミュニケーションははかれる。」このことが今回最も認識することができました。この実習を機に、健常者に対する歯科治療だけでなく、障害者に対する歯科治療についても考えていきたいと思いません。

## 早期体験実習を終えて

歯学科2年 成松花弥

今回、私たち2年生は知的障害者総合援護施設「ココニーにいがた白岩の里」および知的障害者更生施設「太陽の村」での見学体験実習を経験させて頂きました。この実習の目的のひとつは、将来歯科医師としてどのように障害者と関わっていくかを考えるということです。恥ずかしながら私は実習前、「たった2回、短時間、ただ見るだけでそんなこと解る訳ないじゃないか」と実習を軽んじていましたが、今回の体験は障害者支援に関して考える良い機会となりました。この機会を与えてくださった先生方や施設の方に深く感謝します。

最初に訪問した「ココニー」は重度の知的障害を持つ方が多く入所する施設で、私たちの班は重度の知的障害を持つ成人の方が生活する棟（成人部）と、比較的軽度の障害の方が菓子箱の組み立

てなどの仕事を行う様子を見学しました。各々の1日の日課が絵や写真などで示され、理解しやすい工夫されていたり、安全面でもさまざまな配慮がなされていました。大変和やかな雰囲気でしたが、しかし治ることのない重い障害と向き合っている苦しさをを感じる瞬間もありました。この人たちの幸せは一体何なのだろうか、そのために我々が出来ることは何なのだろうか、と問題提起をされ、答えの分からぬまま重い気持ちで1回目の実習を終えました。まだ完全な答えは見つかっていませんが、しかし2回目の実習でそのヒントは得たように思います。

2回目の実習で訪れた「太陽の村」は知的障害や自閉症の方の入所する施設で、見学の前に施設の方から知的障害や自閉症に関する説明がありました。その中に、昔の漁村では魚を捕るために重要なのは視覚情報なので視力の悪い人の地位は低く、現代では自閉症と診断されるような人は視覚情報を捉えることに長けていたため地位が高かった。一方現代では視力の弱い人の多くはメガネなどで視力矯正して社会参加することが出来るが、コミュニケーション能力の低い自閉症の人は障害者となってしまふ、というお話があり、「社会が障害を定義する」ということを知りました。また、誰もが自閉症の要素を持っているが、特にその程度の強い人や能力のバランスの悪い人が社会生活上問題を生じ、障害者ということになるというお話もありました。広義の自閉症が「自閉スペクトラム障害」と言われ、その症状は様々で程度の違いがあるように、ひとくくりに自閉症、知的障害と言っても性格や能力も一人ひとり異なり、それはいわゆる健常者と同じことです。障害者を理解し、適切に関わるためにはその障害の特性を知ることが大前提ではありますが、障害を理解するというよりむしろ、その人の特徴、個性、出来ること出来ないことを知るという捉え方でその人を理解しようとする必要があると感じました。そして今の社会における障害があっても、その人の能力を生かせるよう障害を補う、あるいは障害によって不利にならないような環境づくりが「障害者支援」の基礎であると理解しました。これは我々が彼らを支えるだけの一方的な give and give

ではなく、お互いに出来ることを出し合う give and take の一環であると思います。今の社会のものさしでは、我々が一方的に何かを与えるような錯覚に陥りかねませんが、見方を変えれば必ずしもそうとは限らないように思います。

私が将来歯科医療のプロとなった時、障害者に対して自分の持つ専門知識や技術などを与える状況を考えると、彼ら一人ひとりの状態や理解に合わせて適切な手段を取ることが重要だと思いますが、これはなにも障害者に限った話ではなく、すべての患者様に通じることであると気付きました。障害を持つ人は他の人より配慮や工夫が必要であつたり、出来ないことが多いだけのことです。実際は言葉で言うほど甘くないと思いますが、しかし根底にあるものは同じであるということをおぼろげに感じました。これから専門知識や技術を修得していく上では、今回の実習を生かして、その output を意識しながら学んでいきたいと思っています。

## ～コロニーにいがた 白岩の里～

口腔生命福祉学科2年 阿部 繭

11月11日、私たち2年生は、長岡市寺泊にある新潟県知的障害者総合援護施設「コロニーにいがた 白岩の里」に体験実習をしに行きました。

今では障害者が健常者と同じように教育を受けられることが当たり前になりましたが、この「白岩の里」ができた昭和40年代以前は、知的障害者は教育が免除されており、家にいるしかなく、彼らの受け皿がありませんでした。その後、「白岩の里」のように障害者のための大規模施設が日本各地に建設されました。この大規模施設は、ひとつの共同体、福祉の村として、たとえば郵便局があつたりと、そこから出なくても生活できるように作られました。そして、知的障害者は収容保護され、いずれは社会復帰するための生活訓練や職業訓練を受けられるようになりました。

しかし、現在は時代の流れが変わり、主流は、これまでの大規模施設から各地域それぞれの知的障害者施設へと移行してきています。それでも「白

岩の里」のような大規模施設が存在する意義は、障害が重い人を受け入れていることと通所型ではなく入所型であることです。

「白岩の里」は、入所者の年齢別に、児童部、成人部、高齢期更生部、社会復帰部に分かれています。実習では、2班に分かれて児童部と成人部を見学させていただきました。

私は成人部を見学しました。入所の方が日ごろ使用している浴室や自室、食堂を見て回りました。施設内は、知的障害者が使いやすいように工夫されていました。たとえば、浴室は、広く、湯船は車椅子に乗ったまま入浴できるようにスロープがありました。また、職員の方がおっしゃっていたのですが、自室のドアは、入所者が体当たりしても入所者が怪我をしないようにあまり頑丈なものにはしないそうです。

私にとって今回一番勉強になったことは、「知的障害者は自分の感情を言葉で表現することができない」ということです。このため、たとえば、施設で歯科検診をするときは、歯科医師さんが蹴られたりすることもあるそうです。知的障害者は、不快であることを言葉で表現できないために蹴つたりして体で表現せざるを得ません。だから、知的障害者と接する時には知的障害者の気持ちをしっかりと理解することが大事だと感じました。

しかし、これはそう簡単なことではありません。見学していて、「白岩の里」の職員の方は入所者の気持ちをしっかりと理解されていると思いました。たとえば、施設の中を案内しているときに、入所者が職員さんの説明に割り込んでも、笑顔で接していました。私だったら、ただあたふたしてしまうだけです。

また、この実習で一番心に残ったことは入所者のニコニコした笑顔でした。入所者の方々は、障害を持っていても楽しそうに幸せそうに暮らしていました。知的障害者の方たちの、明るい笑顔を見て、私も心が温かくなりました。

最後になりましたが、このような体験実習の機会をあたえてくださって心から感謝しています。今回の実習で、大学の外に出て、私は知的障害者の施設の雰囲気を感じることができました。このような機会は自分でボランティアに参加した

りしない限り、あまりないことなのでとても貴重な体験になりました。今回学んだこと、感じたことを今後の学習や将来に活かせるように日々励んでいこうと感じました。

## 早期体験実習を終えて

口腔生命福祉学科2年 小林 幸

コロニー白岩の里に行くバスの中ではこの実習の意義など考えていませんでした。以前から見学実習はたくさん行っていたので、特に意識はしていませんでした。しかし、施設に到着して案内の方が「本当はお見せしたくないんです。ここは生活の場なのです。しかし、皆さんがここで見たり聞いたりして学んでくださったことを、将来いかしてくださるといのでお見せするのです。」とお話してくださったときに、今までの見学実習も含め、この実習の意義がわかったように思います。

施設は3寮に分かれていて、そのうちの女性の寮におじゃましました。入る前は恐怖がありました。しかし、入ってから一人の女性が私のそばに来てくださったとき、恐怖はなくなりました。笑顔で優しい印象があったからだと思います。そのあとも学生たちのあとを一緒に歩いている姿が良かったです。

最初の説明で、知的障害とは心がこどものままであるというようなことを聞いたような気がします。伝えたいことがあっても、言葉に変換することができない、だから叫んだり手を上げたりするのは、それだけでも辛くストレスフルなのに、自分が懸命に伝えようとしているのに伝わらないとき、悲しい気持ちで溢れてしまいます。しかし、先ほどの3寮の女性が笑顔であったのは、おそ

らく初めてみる人ばかりで嬉しかったからでしょうか。あの笑顔でその喜びはしっかりと伝わりました。

障害のある方が日本だけにいるというわけではありません。世界各国にいる、つまり環境が整っていない国にもいるということです。今回のコロニーのような施設のない国もおそらくあるのではないかと思います。以前テレビで見たもので、施設はあるものの、そこは女性がたった一人きりでやっているという話でした。しかも障害のある男性はある年齢に達したら、そこを出なくてはならないということでした。理由もはつきりしていませんでした。そこでちょうどその年齢になる、重度の知的障害で身体障害もあり、自身の力では動くことができない方でした。実家は人里離れた山奥で農家を営んでいました。しかも気温が非常に低い土地でした。途中までふもとの男性が彼をおぶつて家まで連れて行ってました。しばらくすると彼のお母さんが待っていました。お母さんは自分の子供を見て涙を流し、動けないでいました。彼自身も涙を流し、何か声を出していました。会えて嬉しかったことを表現しているのであろうと思いました。山の奥では育てることができないからと子供と離れ離れになる決意をしたこと、農家は継いでもらえないけど、こどもが戻ってきて何よりも嬉しいと感じていること、日本の‘離れる’や‘一緒に’暮らすということとは比べてはいけないように感じました。

私はこれから日本の法律や制度を学び、日本で福祉の仕事や活動をするのだと思います。しかし、困っているのは日本だけではなく、世界も同じであること、幸福はすべての人に与えられなければならないこと、忘れないでいたいです。